

日蓮大聖人御書全集

しんごんしちじゅうしょうれつじ

真言七重勝劣事

新版
940
ゝ
947

しんごんしちじゅうしようれつじ

真言七重勝劣事

いち ほっけ だいにちにきよう しちじゅうしようれつ

一、法華・大日二經の七重勝劣のこと

いち しな ふそう にんし いちだいしようぎよう はん

一、尸那・扶桑の人師、一代聖教を判ずること

いち ちんごこつか さんぶ

一、鎮護国家の三部のこと

いち だいいり みつ たからあ ないてん さんぶ あ

一、内裏に三つの宝有り、内典の三部に当たること

いち てんだいしゅう きぶく ひとびと しく

一、天台宗に帰伏する人々の四句のこと

いち こんきよう くらい ひと はい

一、今經の位を人に配すること

いち さんとう

一、三塔のこと

いち にほんこく ぶっしん ざせき

一、日本国の仏神の座席のこと

ほつけ だいにちにきよう しちじゅうしようれつ
〔法華・大日二經の七重勝劣のこと〕

い こんとうだいいち
「已今当第一」

ほんもんだいいち
本門第一

ほけきようだいいち
法華經第一

やくおう いまなんじ つ しょきよう なか もっと かみ あ
「薬王よ。今汝に告ぐ。諸經の中において最もその上に在り」迹門第二

ねはんぎようだいに

きよう よ い
涅槃經第二 「この經、世に出ずるは」

むりようぎきようだいさん
無量義經第三

つぎ ほうどうじゅうにぶきよう ま かはんはや けこんかいこう と しんじつじんじん しんじつじんじん
「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」 「眞実甚深、眞実甚深なり」

けこんぎようだいいし
華嚴經第四

はんによきようだいご
般若經第五

そしつじきようだいろうく
蘇悉地經第六

じよう い さんぶ なか きよう おう
上に云わく 「三部の中において、この經を王となす」

中に云わく「なお成就せずんば、当にこの法を作すべし。

決定して成就せん。いわゆる乞食・精勤・念誦・大恭敬・

巡八聖跡・礼拝行道なり。あるいは、また大般若経を転読

すること七遍、あるいは一百遍なり」

下に云わく「三時に常に大乘般若等の経を読め」

大日経第七

三國にいまだ弘通せざる法門なり

〔戸那・扶桑の人師、一代聖教を判ずること〕

けごんぎようだいいち
華嚴經第一

ねはんぎようだいに
涅槃經第二

ほけきようだいさん
法華經第三

はんによきようだいいち
般若經第一

ほけきようだいいち
法華經第一

ねはんぎようだいに
涅槃經第二

けごんぎようだいさん
華嚴經第三

じんみつぎようだいいち
深密經第一

ほけきようだいに
法華經第二

なんぼく ぎ
南北の義

しん せいとうごひやくよねん さんびやくろくじゅうよにん こうたく ちよう
晋・斉等五百余年、三百六十余人、光宅をもつて長となす

きちぞう ぎ りようだい ひと
吉蔵の義 梁代の人なり

てんだいちしやだいし おんぎ なんがく みでし ちん ずいにだい ひと
天台智者大師の御義 南岳の御弟子なり、陳・隋二代の人なり

みようらくとう もち
妙楽等これを用いる

げんじよう ぎ とう はじ たいそう ぎよう ひと
玄奘の義 唐の始め、太宗の御宇の人なり

般にやきようだいさん
般若經第三

けごんぎようだいいち
華嚴經第一

ほけきようだいに
法華經第二

ねはんぎようだいさん
涅槃經第三

だいにちきようだいいち
大日經第一

ほけきようだいに
法華經第二

しよきようだいさん
諸經第三

ほけきようだいいち
法華經第一

ねはんぎようだいに
涅槃經第二

ほうぞう ちようかんとう ぎ
法蔵・澄觀等の義
とう なか
唐の半ば、
そくてんこうごう ぎよう ひと
則天皇后の御宇の人なり

ぜんむい ふくうとう ぎ
善無畏・不空等の義
とう まつ
唐の末、
げんそう ぎよう ひと
玄宗の御宇の人なり

でんぎよう おんぎ
伝教の御義
にんのうごじゆうだいかんむ ぎよう
人王五十代桓武の御宇および平城・嵯峨の御代の人

しよきようだいさん
諸經第三

ひえいざんえんりやくじ
比叡山延曆寺なり

だいにちきようだいいち
大日經第一

にんのうごじゆうにだいが　じゅんなにだ　ひと
人王五十二代嵯峨・淳和二代の人

けごんぎようだいに
華嚴經第二

こうぼう　ぎ
弘法の義

とうじ　こうやとう
東寺・高野等なり

ほけきようだいさん
法華經第三

ぜんむい　し
善無畏をもつて師となす

だいにちきようだいいち
大日經第一

にんみよう　もんとく　せいわ　さんだい
仁明・文徳・清和の三代

ほけきようだいに
法華經第二

じかく　ぎ
慈覚の義

えいざん　こうどう　そうじいん
叡山の講堂・総持院なり

しよきようだいさん
諸經第三

ちしよう　どう　おんじようじ
智証これに同ず、園城寺なり

ちんごこつか　さんぶ
〔鎮護国家の三部のこと〕

ほけきよう
法華經

たいれきほつけじ　お
大曆法華寺にこれを置く

みつごんきよう
密厳経

ふくうさんぞう
不空三蔵

たいれきにねん ごまじ あらた ほつけじ た
大暦二年、護摩寺を改めて法華寺を立つ

にんのうきよう
仁王経

ちゅうおう ほけきよう きょうじ りようぶ だいにち
中央に法華経、脇士に両部の大日なり

ほけきよう
法華経

にんのうさんじゅうしだいすい こてんのう ぎよう してんのうじ
人王三十四代推古天皇の御宇、四天王寺にこれを置く

じようみようきよう
浄名経

しようとくたいし
聖徳太子

せつつのくになにわのこおり ぶつぼうさいしよ てら
摂津国難波郡、仏法最初の寺なり

しょうまんぎよう
勝鬘経

ほけきよう
法華経

こんこうみようきよう
金光明経

伝教大師

にんのうごじゅうだいかん むてんのう ぎよう ひえいざんえんりやくじしかんいん
人王五十代桓武天皇の御宇、比叡山延暦寺止観院にこれを置く

にんのうきよう
仁王経

ねんぶんとかどしや いちにん しゃなごう いちにん しかんごう
年分得度者、一人は遮那業、一人は止観業なり

だいにかきよう
大日経

金剛頂經 こんごうちょうきよう

慈覺大師 じかくだいし

にんのうごじゅうしだいにんみょうてんのう 人王五十四代仁明天皇の御宇、ぎよう ひえいざんとうとう にし そうじいん お比叡山東塔の西の総持院にこれを置かる

蘇悉地經 ししつじきよう

ごほんぞん だいにちによらい こん そ にしよじゅうしかんあんち 御本尊は大日如来。金・蘇の二疏十四卷安置せらる

〔内裏に三つの宝有り、内典の三部に当たること〕

神璽 国の手験なり

宝劍 国敵を禦ぐ財なり 平家の乱の時に海に入つて見れず

内侍所神鏡天照太神影を浮かべ給う

左馬頭頼茂打たれて焼失す

てんだいしゅう きぶく ひとびと しく
〔天台宗に帰伏する人々の四句のこと〕

いち しんしん うつ
一に「身心ともに移る」

さんろん かじようだいし
三論の嘉祥大師

けごん ちようかんほつし
華嚴の澄觀法師

しんごん ぜんむい ふくう
真言の善無畏・不空

に こころうつ みうつ
二に「心移って身移らず」

けごん ほうぞう
華嚴の法蔵

さん みうつ こころうつ
三に「身移って心移らず」

じかくだいし
慈覚大師

ちしようだいし
智証大師

し しんしん うつ
四に「身心ともに移らず」

こうぼうだいし
弘法大師

今經の位を人に配すること

征夷將軍〈鎌倉殿〉
無量義經

摂政
涅槃經

院
迹門十四品

天子
本門十四品

〔三塔のこと〕

中堂
伝教大師の御建立
止観・遮那の二業を置く。御本尊は薬師如来なり

止観院
延暦年中の御建立。王城の丑寅に当たる

ほんいん
本院

かんむてんのう ごすうちよう てんしほんみよう どうじよう い
桓武天皇の御崇重、天子本命の道場と云う

てんじく りようじゆせん い しんたん てんだいさん い ふそう
天竺には靈鷲山と云い、振旦には天台山と云い、扶桑

ひえいざん い さんごくでんとう ぶつぼう きわ
には比叡山と云う。三国伝灯の仏法ここに極まれり

こうどう
講堂

じかくだいし こんりゆう
慈覚大師の建立

ちんごくつか どうじよう い ごほんぞん だいにちによらい
鎮護国家の道場と云う。御本尊は大日如来なり

そうじいん
総持院

でんぎよう みでし
伝教の御弟子

じようわねんちゆう こんりゆう しかんいん にし しんこん さんぶ お
承和年中の建立。止観院の西。真言の三部を置く

だいさん ざす
第三の座主なり

とうとう い
これ東塔と云うなり

さいとう
西塔

しやかどう
釈迦堂

えんちよう こんりゆう
円澄の建立

でんぎよう みでし
伝教の御弟子なり

ほうどういん
宝幢院

ふかわ
横川

かんのんどう
観音堂

じかく こんりゆう
慈覚の建立

りようごんいん
楞嚴院

にほんこく ぶっしん ざせき
〔日本国の仏神の座席のこと〕

と わ ちよう ほとけ いち ざ
問う。吾が朝には、いずれの仏をもつて一の座となし、
いずれの法をもつて一の座となし、いずれの僧をもつて一
の座となすや。

こた かんぜおんぼさつ いち ざ しんごん ほう
答う。観世音菩薩をもつて一の座となし、真言の法をも

つて一の座となし、東寺の僧をもつて一の座となすなり。

問う。日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は、山寺

種々なりといえども、延暦寺をもつて天子本命の道場と

定め、鎮護国家の道場と定む。しかして、日本最初の本尊、

釈迦を一の座となす。しからずんば、延暦寺の薬師をもつ

て一の座となすか。また代々の帝王、起請を書いて山の弟子

とならんと定め給う。故に、法華経をもつて法の一の座と

なし、延暦寺の僧をもつて一の座となすべし。何ぞ、仏を

本尊とせず、菩薩をもつて諸仏の一の座となすや。

こた

じかく

おんとき

えいざん

答う。もつともしかるべしといえども、慈覚の御時、叡山

しんごん

とうじ

こうぼう

しんごん

こんりゆう

ゆえ

とも

は真言になる。東寺は弘法の真言を建立す。故に、共に

しんごんし

とも

しんごんし

ゆえ

とうじ

ほん

しんごん

真言師なり。共に真言師なるが故に、東寺を本として真言を

あが

しんごん

あが

ゆえ

かんのん

ほんぞん

しんごん

崇む。真言を崇むる故に、観音をもつて本尊とす。真言に

ぼさつ

ほとけ

勝

だん

ゆえ

だいいり

まいとし

は菩薩をば仏にまされりと談ずるなり。故に、内裏に毎年

しょうがつようか

ないどうじよう

ほうおこな

とうじ

いち

ちようじや

め

正月八日、内道場の法行わる。東寺の一の長者を召し

おこな

いち

ちようじやいとまあ

に

ちようじやおこな

て行わる。もし一の長者暇有らざれば、二の長者行う

さん

およ

うんぬん

ゆえ

ほとけ

かんのん

べし。三までは及ぼすべからず云々。故に、仏には観音、

ほう

しんごん

そう

とうじ

ほつし

ひえいざん

きもん

かた

法には真言、僧には東寺の法師なり。比叡山をば鬼門の方と

てこれを下す。くだ 譬えば武士のごとしと云つて崇めざるなり。たと もののふ い あが

故に、ゆえ 日本国は亡国とならんとするなり。にほんこく ぼうこく

と 問う。と 神の次第いかん。かみ しだい

こた 答う。こた 天照太神を一の座となし、てんしょうだいじん いち ざ 八幡大菩薩を第二の座。はちまんだいぼさつ だいに ざ

となす。い げ かみ これより已下の神は三千二百三十二社なり。さんぜんにひやくさんじゅうにしや